

## 明清官話の周辺

中村雅之

### 1. 南京官話の均一性

明清代に、役人や知識人の公用語として、南京を発信地とする「官話」が中国全土に広まっていたことは、現在ではほぼ共通の認識になっている。各地の官話はまれに土地の方言的要素が混じることもあったが、総体として見れば、極めて均一性の高いものであった。

1580年代に広東肇慶で書かれたと思われる『賓主問答私擬』では、*tap*(塔)、*iap*(鴨)などの広東語的な表記も散見するが、全体としては南京の官話と同質の言語と見なし得る。17世紀の日本で中国僧によってまとめられた『黄檗清規』に付された振り仮名発音においても、福建語的な特徴がごく一部に表れるものの、全体としてはやはり南京官話と見なすべき音形になっている<sup>2</sup>。トリゴー(Nicolas Trigault)の編になる『西儒耳目資』(1626)は明末の官話音を体系化したものであるが、その編纂に山西や陝西の人が深く関わっていながら、全体としては南京音を中心に据えており、北方の発音は部分的なものにとどまっている<sup>3</sup>。

### 2. 岡島冠山の浙江音と官話音

江戸時代の唐話資料は当時の中国語を知る貴重な材料である。特に18世紀の岡島冠山は『唐話纂要』においては浙江音(おそらく杭州音)を記し、それ以降の著作では南京音を記しており、比較に恰好の資料を提供している。冠山は語彙や文例については小説など種々の資料を利用したため、北方的な表現も混じっているが、発音については北方的要素は見られない。

冠山資料を見て気づくことは、浙江音と官話音が非常に似ているということである。濁音声母の有無を除けば瓜二つと言ってよい<sup>4</sup>。これは二つの理由によるであろう。第一には、そもそも南京官話が南方雅音を母体として生まれたことである。南京や杭州を含む一帯に、知識人たちの話すゆるやかな共通語(ここでは南方雅語と称する)が存在していて、元代に南京の言語が北方音の影響で変容し、明代に官話となったと考えられる。

第二に、官話の成立以降、南方雅音も少しずつ官話の影響を受け、その音形も官話に近づいてきたのではないかということである。これについては、より古い南方雅音の資料が参考になる。

<sup>1</sup> リッチ(Matteo Rocci)とルッジューリ(Michele Ruggieri)による会話テキスト。cf. 古屋昭弘 1989

<sup>2</sup> 有坂秀世 1938 は、「かやうに我が國に黄檗宗を傳へた高僧達は何れも福建省出身の人であるから、その宗徒が諷経に用ゐる唐音も定めし福建音であらう、とは誰しも一往想像する所であり、又實際黄檗清規の中には如(イ)遺(ミ)次(チュ)勤(キユン)幽(ヒーウ)の如き明白な福州音も見出されるのであるが、それはただ部分的のことである。全體としてみれば、黄檗唐音は、標準語たる官話(殊に南京官話)の音であり、その間にまゝ福州訛を混じてゐるに過ぎない。」と記す。

<sup>3</sup> 果摂一等開口と合口を区別しない南京式(個=過「ko」)と区別する北方式(個「ko」≠過「kuo」)の双方を登録しているのは、北方音をも参照したことを物語る。

<sup>4</sup> 具体的には『唐話纂要』の浙江音では「上ジャン」「別ベ」と濁音になり、『唐話便用』の南京音では「上シヤン」「別ペツ」と清音になる。

『小叢林略清規』は江戸時代に文字化されたものではあるが、宋末元初の浙江音を伝えるとされる。その音形は冠山資料の浙江音と共通点が多いものの、宕撰と梗撰の韻尾をそれぞれ「ウ」と「ン」でかき分ける点が大きくことなる<sup>5</sup>。明初に陶宗儀によって編まれた『書史会要』の中の「いろは」に対する対音漢字はおおむね当時の南方雅音によると考えられるが、そこでは日本語のア段に蟹撰の字が使われるなど、呉方言的な特徴も垣間見られる<sup>6</sup>。『小叢林略清規』や『書史会要』に比べると、冠山資料の浙江音は遥かに南京官話に近づいているのである。

### 3. 北京語と官話と南方雅語

遼代以降の北方では北京語が圧倒的な影響力を持ち続けた。契丹小字、パスパ文字、ハングル、満洲文字の各種対音資料はそのことを明瞭に反映する。一方、明代以降は南京官話が南方のみならず、北方各地の役人たちにも用いられた。北京語においてさえ、官話音の模倣として新たに文言音が生まれたほどである。

南方雅語は、粗野な北京語に対して、伝統的な漢字文化を守り伝える言語として南方知識人たちに用いられたが、ある程度の内部差異を含むものであったろう。明代以降の南京官話の広がりに伴って、南方雅語も徐々に南京官話へと近づいていったようである。結果として、18世紀の段階では、濁音声母を保有する以外は、ほぼ南京官話と変わらない音韻体系になっていた。なお、南方雅語は現代の呉語諸方言には必ずしも直結しない。民衆の方言とは別に知識人たちの雅語が存在したと考えるべきであろう。

18世紀における北京音と南京音と浙江音(南方雅音)の主な特徴は以下の通り。

	北京音	南京音	浙江音
尖団	区別なし	区別あり	区別あり
果撰一等	個[kɤ]過[kuo]	個=過[ko]	個=過[ko]
濁音	道[tau]	道[tau]	道[dau]
宕江撰入声	菓[iau]	菓[ioʔ]	菓[iaʔ]

北京語と南方雅語では全項目に差異が見られるが、南京官話は中間的である。それ故に官話が全国に広まったとも言えるし、逆に官話が他の方言に影響を与えてきたとも言えるのである。

参考文献：

有坂秀世 1938「江戸時代中頃に於けるハの頭音について—唐音資料に反映した」『国語と国文学』15-10.

有坂秀世 1950「書史會要の「いろは」の音註について」『言語研究』16.

吉池孝一 1987『小叢林略清規』仮名音彙—吳方言研究資料として』『中国語学』234.

古屋昭弘 1989「明代官話の一資料—リッチ・ルッジェーリの「賓主問答私擬」—」『東洋學報』70-3・4.

<sup>5</sup> 「湯タウ」「堂ダウ」「良リヤウ」「相シヤウ」に対して「生サン」「更カン」「名ミン」「清シン」など。cf. 吉池孝一 1987.

<sup>6</sup> cf. 有坂秀世 1950.